

35 馬の丞

豊臣秀吉が天下を取ったとき、土地を測量してばっちり年貢を取ることにした。太閤検地つてういんや。

西袋には、伊東丹後守がやってきた。村総代の馬の丞はいうた。

「私が小縄で前もって畑や田んぼ一枚一枚測っておきました。西袋は六百石の米のとれる土地でいんや。」と。

丹後の守は、「いや、えっと見たところ八百石以上ある。八百石でゆるしやう。」と。うた。「そんな無茶な。うても承知できません。」と、馬の丞はゆずりた。「そんなら測るぞ。よい。か。もし八百石以上あったらお前の首をもむいんや。」と。「は、は、は、ゆるぎます。」と、返事した。すると、丹後守は山にのぼって大縄で道も川も全部ひくくめて測ってしもた。「おい、千二百石もあったぞ。」と。うた。「馬の丞の首を切つてもた。」

それから明治になるまでの二百七十年間も、西袋はありもせん土地にまで年貢かけられて、ひ

びう困ったんやと。

ある年、見かねた鯖江の殿様が、年貢を少し軽くするよう申し渡したほどやった。馬の丞もあの世ですこしは浮かばれたやろか。

36 河和田にも弁慶が

もう八百二十年ほど昔のこと。頼朝に追われた義経と弁慶らは、北陸道を奥州平泉へ落ちて行くんやが、その途中、この河和田にも来たんやと。

まず西袋まで来ると、熊野の大神が急に現れなさって、山の中の大きな岩穴につれていって下さったと。人が五・六人入れる穴で、「弁慶のかくれ岩」っていうんや。この岩の下に、もう一つ大きい岩があって、岩の上に弁慶の足の跡と、馬のひづめの跡がのこつていんやと。

椿坂には、山の中に「流し」ってういんや。ひらいた岩がある。その岩の上のういんやのういんや、